

ポスター発表

[P-29-20_38] Poster session

Fri. Mar 29, 2019 9:00 AM - 3:30 PM ポスター会場・展示 (大教室)

[P29-22]生体内卵子吸引 (OPU) 技術の現地実証の取り組み

○坂上 信忠¹, 近田 邦利¹, 森村 浩之¹, 齋藤 直美¹, 大滝 幸子¹, 喜多 浩一郎², 秋山 清² (1.神奈川畜技セ, 2.神奈川県畜産課)

【目的】ホルスタイン種泌乳牛の OPUと体外受精により後継牛の生産が可能となっている。そこで本県では、後継牛確保を目的として、県内酪農家において研究成果を実用化するため現地実証を行った。【材料と方法】酪農家が飼養するホルスタイン種経産牛延べ44頭、未経産牛2頭から OPUを行った。供卵牛への前処理は以下の3種とした。1) 10AU区：FSH10AUを10ml生理食塩水に溶解し、OPU2日前に皮下投与、2) FGT区：FSH30AUを2AUあたり1ml生理食塩水に溶解、漸減的に4日間投与し翌日 OPU、3) SOV区：上記2)に加え、PGと GnRHで発情誘起し GnRH投与24時間後に OPU。回収した卵子は既報（坂口ら、1995）に基づき G1~6に分類し、体外培養後、発生した胚盤胞はホルスタイン種に移植した。【結果】総卵胞数1,426個、卵子数754個、胚盤胞数244個、胚盤胞発生率32.4%、新鮮胚受胎率は36.5%であった。総卵胞数、大卵胞数と卵子数に、大卵胞数、卵子数と胚盤胞数に有意な正の相関が認められた。供卵牛の血中グルコース値と G1卵子数に正の相関が認められた。また、前処理別の胚盤胞数は、10AU区と比較して FGT区および SOV区が有意に多かった。これらの結果、農家の状況に合わせて前処理を選択することで、多くの供胚牛から所内と同等の胚盤胞発生率で雌胚が作出でき、後継牛生産が可能であった。